

アリ・スミスの『春』における他者 対話について

中谷 紘子

1. はじめに

2019 年に出版されたアリ・スミス(Ali Smith,1962-)の小説『春』(*Spring*)は、『秋』(*Autum*,2016)を封切りに EU 離脱後の英国を描く四季四部作の 3 作品目であり、ウィンドラッシュ事件を背景に不法入国者や移民の問題が主に取り上げられている。小説には二人の視点人物がおかれ、老演出家のリチャード(Richard)と、入国者退去センターで働くブリタニー(Brittany)の物語が、謎の少女フローレンス(Florence)の出現によって交錯するのだが、提示されているテキストには、実際の言動に加えてメールの本文や創作脚本の一部、箇条書きのメモ、小説の登場人物を廃した春という季節に関する叙述など、異なる素材で構成されており、テキストの断片的性質が目立つ。加えて意識の流れの手法の多用によって、時系列が取りづらい。さらには結末の「分かりにくさ」がある。ではこの小説を一体どのように捉えたら良いのか。本発表ではこの問いに答えるべく、スミスの得意とする会話の描写に着目し、ミハイル・バフチン(Mikhail Bakhtin,1895-1975)のダイアログ論を手がかりに登場人物たちのコミュニケーションを照射してみたい。そうすることで、社会の分断と統合という小説のテーマがよりはっきりすると考えるからである。さらには小説内に提示された他者の概念を、ダイアログ／モノログの言語意識を以って考えてみる。

2. 「ダイアログ」と「モノログ」：『小説の言葉』におけるバフチンの概念の中心議論

バフチンの『小説の言葉』(1975)は小説の文体論として、その対話(ダイアログ)に注目したものであるが、あらゆる言葉は文化的、社会的、個人的イデオロギーを含んでいることを前提に、自己の言葉に他者の言葉を矛盾させ、ダイアログを生成することが重要であると説く。ダイアログとはつまり、内的なものも含めて、自己の言語意識に対して能動的になった上で他者と繋がり、自己と他者の矛盾(違い)の中で新たな意味を創造していく過程であり、継続的に発生するべきものであるとする。対するモノログとは、権威的(あるいは受動的)発話、神話や詩などのように自己の言葉に対して肯定的な評価のみが現れている発話で、言語意識が能動的でないことで陥る発話だとする。つまり、言語意識の能動性には有機的な「他者」との繋がりが有効で、対話自体が自己の意識を形成する過程になる。上記の意味でバフチンは、継続したダイアログこそが我々が真に生きることを意味するという。また小説においてダイアログを検討すると、言語的能動性の獲得を手助けする他者のロールモデルとして、習慣化されたシステムに対して素朴な無理解を示す「悪漢・道化・愚者」の存在があり、これらの他者機能を重視している。

本発表ではこれらの概念を参考に、モノログを自己の言語意識に他者の機能が入っていない状態、ダイアログを他者と相互交流ができていて自己意識が発展しているものとする。さらに相互交流の結果生まれる新たな言葉の意味を、物事に対する視点や捉え方まで広げて考えることにする。

3. 『春』の他者と対話

上記のダイアログ／モノログ論を手がかりにスミスの『春』を読み解くと、小説内の会話には、バフチンのダイアログ／モノログと、それらを前景化する他者がわかりやすく存在している。『春』に複数存在する他者のうち、最も重要な役割を担うのはフローレンスだ。彼女は監視カメラの顔認証システムにヒットしない黒い肌を持ち、白人社会からは見えない「透明人間」である。しかし彼女には声があり、その発話は麻痺状態に陥っている英国社会に直接的に疑問を投げかける。他の者たちと比べてフローレンスは異質であり、そのあり方がバフチンの「悪漢・道化・愚者」のモデルに合致する。フローレンスの異質さは、例えば小説に登場する他の人物とブリタニーあるいはリチャードとの会話を分析することで明らかになる。

ブリタニーとその同僚のトーキル (Torquil) とのある会話を例にとれば、ブリタニーの発言に対してトーキルは “Uh huh”(134) という反応しか寄越さず、ブリタニーの発展的思考に介入しない。お互いにダイアログ的会話をしないことで、つまり意図的にモノログにとどまることで、不条理な現実世界に自らを「存在」させないようにしているとも言える。入国者退去センターの他の被収容者の場合を考えると、ヴェトナム出身のヒーロの話す外国語としての英語をブリタニーが訂正する会話がある。ヒーローは他者機能を奪われているのだ。ブリタニーは、他者を拒絶することでその言語意識は「麻痺」状態にある。

もう一人の視点人物である老演出家のリチャードにとっての他者は、かつての相棒パトリシアの双子の息子たちと、売れっ子の現代監督タープ (Terp)、それに想像上の娘である。双子やタープとの接触において、リチャードは彼らの他者性を世代間ギャップとして認識しているが、会話はろくに成立しない。“I’d like to suggest a radical departure. Please hear me out” (97) や “I feel that if we don’t it will be a waste and a lost chance” (99) から、自己の正当性の主張と「聞かせよう」という態度が明らかで、他者と有機的に対話することはできない。その結果、彼は自らを残骸化し、さらに意識は膠着する。別の他者としての想像上の娘はリチャードの分身的存在であり、リチャードの言語を批判的に評価して内的ダイアログを発生させるかに思えるが、“You don’t exist” や “Go away”(110) といったリチャードの発言から分かるようにバフチンの他者の機能を全うしない。

一方でフローレンスはその登場時から、接する人々に対してバフチンの他者として存在する。フローレンスに「常識」は通用せず、そのために、自己の中に批判的な態度と新たな意味生成を促すような会話のやりとりがテキスト上に提示される。つまり、彼女の存在あるいはコミュニケーションを通して、ブリタニーとリチャードの二人がどのようにダイアログ形成していくのが鍵となり、小説は彼らが能動的言語意識へ向かうプロセスを示していると見ることができる。

4. おわりに

小説『春』は直線的プロットが捉え難く、3部構成のそれぞれの部の最後の1章に3月、4月、5月の自然界における季節の流れが順に描かれていることで、その芽生えの雰囲気全体に流れる。これが一つのテーマとなり、二人の焦点人物たちが示す断片的情報に意味付けできる構成になっているが、この「雰囲気」は、実はバフチンのダイアログという会話状態への生成プロセスを追うことでより強くと掴むことができる。小説内には様々な他者が存在するが、彼らとのモノログ的な会話を提示することで、視点人物の「状態」を見事に表現されている。そして最終的に二人の焦点人物のダイアログ生成を提示することで、その lively な life とでもいうべき、動き出す「生」が確認できるのだ。

半ば麻痺状態の現実社会にあって、私たちは「ダイアログ」を忘れがちだ。スミスは強烈な「他者」フローレンスを存在させることで、それに気づかせてくれる。しかし同時に、フローレンスのような極端な他者に極端な方法で揺すぶられることでしか本質に気づけず、自己の創造ができないとすれば、私たちはそこに危機感を持つべきなのかもしれない。小説『春』は、情報過多で時に不寛容の時代に、バフチンの「対話」の重要性を私たちに再認識させてくれるテキストだと言えるのだ。

参考文献

Smith, Ali. *Spring*. Penguin Books, 2019. [アリ・スミス『春』木原善彦訳, 新潮社, 2022年.]

桑野隆著『生きることとしてのダイアログ—バフチン対話思想のエッセンス』岩波書店, 2021年.

ミハイル・バフチン『小説の言葉』伊藤一郎訳, 新時代社, 1979年.